

「海洋散骨」の実際

——実務上のポイント解説

第5回

宗教者と海洋散骨

和田 睦美

一般社団法人全国海洋散骨船協会
事務局長／海洋散骨ディレクター講師



今号では、「宗教者と海洋散骨」というテーマでお話しさせていただきます。とはいえ、私は宗教者でも宗教の専門家でもありませんので、あくまでも私見であることをご承知おきください。

宗教者は散骨をどう思っているのか

宗教者は、「散骨」をどのように思っておられるのでしょうか。答えは、「その宗教者による」と私は思っています。前回の連載後にいただいた質問に、「地元の神社が散骨事業を行なっているが、そもそも宗教者が散骨を行なうことは可能なのか」というのがありました。

海洋散骨をスタートするには、特別な届出や資格等は必要ありませんので神社がその事業をはじめるとも自由ですし、以前から実施している神社もあります。

以前、私が拝見した、ある神社のホームページ（HP）には、「いつ頃からはわからないが、この神社では、亡くなった方のご遺骨を海に撒く習慣があった」と記載されていました。その神社は海に面しており、社殿脇から海に向かって石の階段がつくられ、階段の上には鳥居があります。

このHPを拝見したのはかなり昔のことでしたが、現在は、そのHPはリニューアルされており、先ほどの文面はどこにも見当たりませんでした。しかし、現在も海洋散骨に力を注いでお

られるようで、チャーター船を使用し海洋散骨を行なっているようです。

そもそも神道には、人は亡くなると、霊魂になって家族を守るという考えがあります。また、死は穢れという考えもあり、神社の境内にはお墓をつくらないのが一般的だそうです。もしかすると、死後の肉体には、あまりこだわりのないのではないのでしょうか……。

では、仏教ではどうでしょうか。仏教と散骨との関係を調べてみたところ、仏教として散骨を批判する記述はあまりありませんでした。もちろん、なかには散骨を非難する一部の宗教者もおられるようで、そうした意見のなかには、「そもそもお骨は墓に収めて、遺族が定期的に供養するもの」というのが目立ちます。しかし、散骨の「何が悪いのか」について言及するものは見当たりませんでした。

ちなみに、「散骨は菩提寺との関係を悪くする」といった声を耳にすることがありますが、実際には散骨そのものの問題よりも、揉め事に発展しやすい墓じまいによる「離檀」を気にされる方が多いようです。

檀家が減ることで、寺の存続そのものが危ぶまれる現状があるでしょうし、「散骨するので離檀する」という檀信徒に対する、嘆きのようなものなのかもしれません。

そもそも、“遺骨はお墓に安置して定期的に遺族が訪れ供養するべき”との考えは根強く残っています。しかし、

宗教者の利害関係がそこにあるのも否定できないのが実情ではないでしょうか。もともと仏教では、古くから火葬が行なわれており、仏教発祥の地であるインドでも、火葬後、聖なる川（ガンジス川）に流すという風習があります。

火葬が仏教の葬法という言葉もあるようですが、わが国においても「仏教式葬儀」が拡大するとともに、火葬がふえていったそうです。もしかすると、仏教においても生前の肉体にはあまりこだわりがなかったのかもしれませんが。この点においては、キリスト教やイスラム教のように、人間は死んだ後に神とともに復活するため、肉体が必要と考える宗教とは一線を画していると思われる。

以上のように、神道や仏教界の方から、散骨に対してこれといった正式な見解は発せられていません。それぞれの宗教者が個別に意見を言うことはあっても、神道として、仏教として散骨に対する賛否は明らかにされていないように思われます。

近代の散骨は、1991年に「葬送の自由をすすめる会」が実施した公開散骨がはじまりといわれていますが、それ以前から、散骨は法令上何らかの問題があるのではないかと指摘され、実際に誰も散骨を行なわなかったために、宗教家による見解が発せられなかったのでしょうか。

いま、散骨はふえています。しか



和田 睦美 (わだ むつみ)

2016年6月、全国海洋散骨船協会設立とともに事務局長に就任。19年、理事会の要請により、「海洋散骨ディレクター」テキストを編纂。20年1月には、第1回海洋散骨ディレクター講習にて講師となり、現在も継続中

し、全体からするとまだまだ少数派です。むろん、過去においては、散骨に対する需要も少なかった。というより、散骨、特に海洋散骨については、思いもよらなかったというのが当時の実態だったのでしょう。

事実、「墓地、埋葬等に関する法律」（墓埋法）の条文に散骨に関する記載がないことについては、厚生労働省が1997年から98年にかけて開催した「これからの墓地等の在り方を考える懇談会」の報告書に、「散骨は、墓地埋葬法立法当時、社会的事実がなかったため、あえて規定しなかったものと考えられる」（一部抜粋）と記載されていることから明白です。

こうした背景から、仏教界も神道界も散骨に対する正式な見解を述べる必要を感じていないと思われます。

散骨は、現代社会における新たな葬送の形です。身近な例では、俳優の石原裕次郎氏が亡くなった際に、兄・石原慎太郎氏は海に散骨したいと考えたようですが、当時の法律などを鑑み、散骨ができなかったことが後年の談話などで明らかになっています。しかし、当の石原慎太郎氏が亡くなった2022年には、葉山沖で散骨式が行なわれ、マスコミもこれを盛んに報道しました。石原裕次郎氏が亡くなったのは1987年。石原慎太郎氏が亡くなる2022年までの35年間でこれほどまでに時代が変わったのです。そう考えると、海洋散骨はここ30年程度の歴史

しかないということです。

仏教や神道は数百年、数千年をかけていまの形態になりましたが、海洋散骨がこれからの葬法であるとするれば、仏教や神道がどのように散骨と関わっていくのか、たいへん興味のあるところでもあります。

仏式・神式散骨への期待

ところで、実際の散骨の現場はどうなっているのでしょうか。私の知る限り（主に東京湾においてですが）、海洋散骨は無宗教で行なわれることが多いように感じます。

時折見かける散骨のために出航する船や、各散骨事業者のHPなどを見ても、散骨船に宗教者を乗せて供養する様子はあまりありません。

私自身、海洋散骨ディレクターの講習においても、また、前回の連載でも、ご遺族の思い出に残る散骨セレモニーの演出は海洋散骨ディレクターの肩にかかっていると申し上げました。

近年、一般的な葬儀においても無宗教葬がふえてきたといわれていますが、実際は、まだまだ仏式の葬儀が多いのではないのでしょうか。

これから先の散骨を想像するに、もし仏教界や神道界が散骨に対して積極的に関わりをもつようになったとしたら、今後、散骨の様式は変わるかもしれません。

たとえば、散骨式を専門とする僧侶

や神職の方が現われ、散骨したい人がもっと気軽にお願いできるようになれば、仏式や神式の散骨もふえるかもしれません。

海洋散骨を受注する側にとっても、お客様の要望によって、仏式、神式といったように選択肢がふえれば、海洋散骨のニーズがさらに高まる可能性がありますし、お客様にもお勧めしやすくなります。

いずれにしても、宗教関係者の多くは、海洋散骨については様子見をしている状況ではないかと思えます。

もちろん、海洋散骨の件数自体も多くはないため、宗教界からも相手にされていないのが現状なのかもしれませんし、冒頭に紹介した神社のように、自社で海洋散骨を受託したほうが、効率もよく、経済的な効果もあるでしょう。

個人的な意見としては、宗教界の方にも、海洋散骨を理解していただき、より積極的に関わっていただける方が現われることを期待しています。



全国海洋散骨船協会
MARINE ASH SCATTERING BOAT SERVICES ASSOCIATION

■(一社)全国海洋散骨船協会の概要

所在地：東京都渋谷区東3-25-10 T&Tビル
設立：2016年6月
理事長：志賀 司
加盟社数：正会員12社（2024年3月現在）



協会HP/海洋散骨ディレクター講習
についてはこちらから